

「一に多種有り、二に両般無し」

重田 みち

世阿弥の能伝書『風曲集』最後の条は、有文音感・無文音感の品等論である。音曲の風体には、「曲をつらね、句を」色どった「聞き所多き」有文音感と、「声聞無文にて、さして心耳を動かす曲はなくて、たた美しく、たぶやかに聞ゆる」無文音感とがあるが、無文には、「曲を尽くし、文正を磨きて後、安き位の妙聞になりかへる」上果の無文（有文を極め過ぎたる無文）と、「終に曲をも心えず、文正をも習伝せずして、たゞ無心の」不覚の無文とがあると説く。そしてその末尾に次のくだりがある。

しかれば、無文音感は、有文ともに籠るがゆへに、是を第一とす。有文の音感は、無得までには極めぬ所の残るがゆへに、第二とする也。「一に多数あり、二に両判なし」と云り。

右の傍線部は禪語で、「一に多種、二無両般」（一に多種有り、二に両般無し）が本来の形であり、川瀬一馬氏が『句双紙』（『禅林集句』）より、その後香西精氏が『碧巖録』第二

則の雪寶による頌より、同じ言葉を見つづられた（川瀬氏『世阿弥二十三部集』昭20・香西氏『世阿弥の禪的教養』『文学』昭33、12）のは周知のとおりである。

一方、解釈については、この言葉の出典が不明であった時期の、能勢朝次氏による「一といふ時にはその中に多を含むが、二といへば二以外のものは含まないといふ意であらう」（『世阿弥十六部評釈』昭19）というのが現在でもほぼそのまま受け継がれているようであり、「二は二かぎりのものだ」（小西甚一氏『世阿弥集』昭45）などとされている。

しかし、「二種類」という「両般」の意味と、「（の中）に……がない」という「無」の語法の両方を勘案すると、「二に両般無し」の部分を右のように解釈するのは無理であろう。ここを直訳すれば、「二種のものの中に、二種のものが含まれない」になるはずである。

最近出版された入矢義高・溝口雄三・末木文美士・伊藤文生諸氏訳注『碧巖録』（岩波文庫、平4）では、「二に多種、二無両般」が

「一つの理にもさまざまな面があるが、その多様さの一つ一つが別ものではない」と訳されている。これは右の直訳と同じ内容を意識されたもので、従うべき解釈だと思われる。

さて、右のように解されるこの句を、世阿弥はどんなことの譬えとして『風曲集』の末尾に引いてきたのであろうか。

能勢氏は、前掲書において「無文を（一に多種有り、二に両般無し）の（一）に、有文を（同じく）二に配して考へてゐるものと思はれる」（括弧内筆者注）とされ、第一等の無文は有文の要素を含むが、第二等の有文は有文それだけでしかない」といった意味合いだと解釈されたようである。後の解釈もこれと大差はない。しかし、この句の正しい解釈が先述したとおりで、「一」「二」が序数詞でないからには、本来ならば右の解釈は成り立たないはずである。

そこで、この句の「一」が無文、「二」がその要素を指していると考えれば、つまり、有文はひとまず措いて、無文を説明するものとして句が引用されたと受け取れば、次のような解釈が考えられないだろうか。すなわち、無文の境地に至るまでには、稽古を尽くし、有文を極める過程が不可欠であり、無文には、その過程がすべて籠っている。また、その過程が、無文という一つの境地に帰結し

てくるのだ」という解釈である。この句を世阿弥が正しい意味のまままで引用したとすれば、右のような解釈を採らざるを得ないのではないか。

この解釈いかんによって、世阿弥が本条で述べようとした論の中心が多少ずれてくる。従来の解釈では、この句は有文・無文の品等の差を強調していることになる。が、正しい意味で世阿弥が使ったとすると、有文はひとまず置いて、上果の無文と不覚の無文の違いを強調していることになる。

確かに本条には有文と無文の差別が説かれているが、それは、無文音感に対して有文音感をとさら低く位置付けようとしたからではなからう。本条の最初の方には「是（＝日有文音感と無文音感）は、いづれも勝劣有まじき也」（括弧内筆者注）と記されている。また、「曲の位」について述べた『曲付次第』の第四条においても、「極むる堺の」有文音感は、上果の無文音感に次ぐ第二の位と定められており、決して低い評価ではない。むしろ、「一に多種有り、二に両般無し」の句で締め括る『風曲集』本条の特徴で、『曲付次第』に言及がないのは、上果の無文と不覚の無文の差別の論なのである。

もともと、世阿弥が禅語を自己の論に引用するのに、本来の意味で用いていたか否かに

ついては疑問が残る。例えば、本来名詞としてのみ使われる「公案」を、世阿弥が『風姿花伝』で動詞として誤用していることは周知のとおりである。また、『九位』の第三位に「銀椀裏に雪を積む」という有名な禅語が引用されている。これは本来、これまで解釈されていくように、銀の椀と雪とは色が似ていて区別をつけ難いが、全くの別ものだという意味である。が、世阿弥は『九位』において、この禅語を美的イメージで捉え、「白光清浄なる現色、誠に柔和なる見姿」と説明し、このようなイメージで表される芸風を「閑花風」と称している。これも本来の意味から大きく外れた用法である。

本条が上果の無文と不覚の無文の差別を強調しているのは先述したとおりだが、本条の最後（先に引用した部分）が結局無文音感と有文音感の位の差別の論になっており、「一に多種有り、二に両般無し」がその末尾に引かれているのに注目すると、世阿弥がこの句を、従来の解釈と同様の意味で用いた可能性も残される。

注・本文の世阿弥伝書の引用は、日本思想大系『世阿弥 禅竹』（表章氏校注）の本文により、若干読み易く改めた。

（法政大学大学院生）